（韓国）未認可代案学校の性格変化に関する事例研究

―ガンジー学校共同体を事例として―

石善雨

(Korean) Research on Character Change of Unauthorized Alternative School

Seonwu SEOK

Alternative education movement in Korea has been mainly expanded by alternative school. Early alternative school was given positive evaluation that it can complement problem in public education system. After that, many alternative schools have been established, and part of those were institutionalized by government approval. However, unauthorized alternative school, especially full-time alternative school mainly bear alternative education movement. Unauthorized alternative schools have common character, disappointment and criticism for public education, and pursuit of alternative education practice.

However, it can be said that such common character of alternative schools was changed. Of course, change of educational practice exists because of change of Korean society and educational environment. I discuss whether the change of character actually exists by case study in Gandhi school community.

目 次

1. はじめに
　1-1. 先行研究
　1-2. 研究対象と研究方法
2. 本論
　2-1. 初期の山清ガンジー学校
　2-2. ガンジー学校の変化
　2-3. 現在のガンジー学校
3. 終わりに

1. はじめに

韓国の 90 年代は公教育の問題が社会問題として台頭した時期であった。当時の金永三政府はこの問題を解決するために多様な教育改革を実施するが、それは「5・31 教育改革」（1995）と呼ばれ、その後の韓国の教育改革に大きな影響を及ぼすことになる。その時期の前後に民間においても公教育を批判しながら新しい教育を模索する活発な動きが現れた。1986 年から 1993 年まで「また一つの文化」が行った小学生キャンプがその先駆的な試みであった。90 年代に入ってからも同様の試みが全国各地で起きた。「創造学校」（1992）、「ミンドゥレ・マンドゥレ」（1993）、「自由学校ムルコ」（1993）、釜山「創造学校」（1994）、「みんなで作る学校」（1994）、「野花咲く学校」（1994）、「共同育児協同組合」（1994）、「別で、また一緒に学校」（1995）などがそれに該当する（姜大仲 2002）。このような代案的教育を実践する代案

教育運動の展開は一般学校に代替する全日制代案学校の設立へとつながり、1997 年 3 月に「ガンジー青少年学校（山清ガンジー学校）」が開校することになった。代案学校[1]の教育実践が画一的な公教育の多様化につながり、一般学校にも肯定的な影響を与えると判断した政府は「学校中途脱落者予防総合対策」（1996）の一つの策として代案学校を制度圏に受け入れる政策を採用することになった。その結果、未認可で運営されていたいくつかの代案学校が認可を受けた。このように認可された代案学校は「特性化学校」と呼ばれるが、進学のための入試中心ではなく、各学校なりの特色を作り、それを強化した教育課程の運営ができるようにした学校の一つとして位置づけられたのだ。

しかし、認可を受けた代案学校は全体の一部にとどまり、代案教育運動は依然として未認可の代案学校、中でも全日制代案学校を中心に活発に展開してきている。代案教育運動は公教育の外側で多様な形態と方式、教育実践を通して公教育を補完しつつ、正しい教育は何かを問い続ける重要な役割を果たしてきた。教育科学技術部によると、代案学校は初・中・高等課程を全部合わせても全体学校数の 1%程度で、公教育に比べれば小規模だが、代案学校を中心とした多様な教育実践は韓国の教育に、公教育に多くの影響を与えてきたといえる。それにもかかわらず、そのような未認可の代案学校に関する研究は十分行われていない。

1997 年に全日制代案学校が初めて登場して以来、今日に至るまで多くの代案学校が造られたり、廃止されたりしている。各代案学校の教育課程と教育実践は一言では定義しがたいが、公教育に対する失望と批判から始まって生徒のための教育（代案教育）、そのための空間、場所の提供を追究するという共通の性格を持っていたといえる。代案学校をめぐる韓国社会の変化、代案学校内部の変化の中で各代案学校の姿も変わってきたが、その過程でこのような共通の性格にも変化があったのではないか。変化があったならば、どのような変化であったのか。本研究では、この問題を中心に考えてみたい。

代案教育運動の実践形態は様々であるが、その中心的な現場は未認可の全日制代案学校であるといえる。そこで本研究では未認可の全日制代案学校の中から事例を選んで代案学校の性格変化を考えてみることにする。

1-1. 先行研究

代案教育、代案学校に関する研究は、公教育の問題が台頭した 1990 年代後半から増加した。1990 年代の研究は既存の学校で発生している問題を分析し、その解決策を考えるものが多かった（姜テジュン・李ゾンテ・李ミョンジュン 1996； 李ゾンテ 1998, 1999, 2000； 金ヨンイル 1999 等）。2000 年代に入ってからは、代案学校に関する政策や関連法、教育課程に関する研究が主となった。研究対象とされる代案学校は認可を得た制度圏内の学校が多い（姜大仲 2002； ソキョンヒ 2006； 李ビョンファン 2007； 李ウォンヒ 2008; ファンジュンソン・李ヘヨン 2010 等）。日本でも韓国の代案教育、代案学校に関する研究が行われている（永田 2005； 橋元 2009, 2011, 2012）。たとえば、橋元（2012）は韓国の代案学校の登場背景から現在（2012）までの状況を時代区分しながら説明している。しかし、その区分は代案学校の類型や形態変化によるものであり、日本との比較が中心的な内容である。以上のような先行研究の中で、韓国の代案教育において重要な役割を果たしている未認可代案学校を対象にして、全日制代案学校の登場以来の性格変化を詳細に検討した研究は見当たらない。そのため、本研究には意義があるのではないかと考えられる。

1-2. 研究対象と研究方法

具体的な事例としてガンジー共同体の三つの学校

を分析する。ガンジー共同体は最初の全日制代案学校である山清ガンジー学校をはじめ、その後開校した複数のガンジー学校、ガンジー代案教育センター、ガンジー教育研究所などを含めて表す言葉である。その中でも山清（サンチョン）ガンジー学校（現山清ガンジー高等学校）[2]、堤川（ゼチョン）ガンジー学校（中・高統合課程）[3]、錦山（クムサン）ガンジー学校（高等課程）[4]を研究対象とする。

これらの学校を研究対象とすることにはいくつか理由がある。まず、山清ガンジー学校は最初の全日制代案学校として、その後に設立された多くの代案学校に影響を与えたことである（代案教育白書 1997 - 2007、2007）。第二に、ガンジー学校の設立と運営に関わり、校長を務めたヤンヒギュ、ヤンヒチャンが代案学校の教員養成、「代案教育連帯」の活動等を通して代案教育運動に大きい影響を及ぼしていることである。代案教育連帯は、多様な代案教育運動が活発に行われる中で、代案教育現場と活動家間の連帯の必要性によって 2002 年 6 月に設立された民間 NGO 団体である。現在（2014）、53 箇所の代案教育現場と代案教育教師、保護者、活動家、研究者などで構成され、代案教育に関する研究事業、教師・保護者への教育事業、協力と連帯のネットワーキング事業、代案的生活と教育の社会的実践活動などを主な事業としている。宗教的目的の代案学校を除いたら、韓国の代案教育運動において代表的な団体としてみられる。

第三に、各ガンジー学校の教師たちも代案教育運動に積極的に参加している点である。各ガンジー学校は代案教育連帯のメンバーとして多様な活動に参加している。第四に、各ガンジー学校は代案学校、代案教育の関連研究においてしばしば言及され、研究対象になっている。以上の点を踏まえると、韓国の代案教育運動において重要な現場である未認可代案学校の性格変化を考える時にいい研究対象になるのが、この三つのガンジー学校だと思われる。

筆者は 2011 年から 2014 年 4 月まで 18 回三つの学校を訪問して、各学校の教師と生徒にインタビューを行い、関連資料を集めてきた。本研究では、各ガンジー学校の教育課程と教師、生徒のインタビュー、学校誌等の資料を基に、ガンジー学校の性格変化を考察する。

2. 本論

2-1. 初期の山清ガンジー学校

前述したように、90 年代の韓国では公教育の諸問題が表面化し、人々の関心を集めた。新しい教育に対する要求が増大し、そのための動きも活発になり、代案教育運動が拡大した。その中で登場した全日制代案学校は重要な意味を持っていた。以前の代案教育は終末や夏休み、冬休み等の時間を利用した短期プログラムが中心であったので、公教育を補完し、支援する次元に留まっていた。しかし、全日制代案学校はその次元を超え、代替できるものであった（李ゾンテ 2001）。公教育の一般学校に等しい教育課程と学ぶ時間を持ち、そのための施設と空間を備えた学校形態だったからである[5]。

韓国で最初に開校した全日制代案学校は山清ガンジー学校である。代案的短期教育プログラムを運営していたガンジー農場がその母体となった。このガンジー農場は 1994 年にヤンヒギュによって設立された。ヤンヒギュは以前から新しい教育のあり方を模索していて、ガンジー農場を通してそれを実践していた。このプログラムに参加した子供の保護者たちと、彼が「緑色評論」に寄稿した文に共感した人々によって新しい学校を設立するための委員会が結成され、1997 年 3 月に山清ガンジー学校が開校することになった。

山清ガンジー学校は公教育、即ち既存の学校教育に対する根本的な批判から出発し、生徒が幸せに学べる教育を志向している。これは、山清ガンジー学

校の設立者であり、元校長であるヤンヒギュの学校設立の趣旨と寄稿文を通して確認できる。

私は高校時代を悪夢のように過した者の一人である。当時の私は精神的に苦しんだだけでなく、肉体的にも崩れて、一生健康の問題を抱かれた時期であった。高校卒業の頃、私は自分自身と友達に学校設立の夢を告白した。「いつか必ず私の通った学校とは異なる、幸せな学校を作り上げよう」と。私は一度もこの決心を忘れたことがない[6]。

私は高校の時に自分の通っている学校を学校と呼ばず、「収容所」と呼びました。それは、学校が、文字通りに自由が抑圧され、愛が欠乏している場所のように思われたからです。高校を卒業しながら、私は少なくとも自分が通った学校のようなところではなく、生徒が幸せと喜びを持って通える新しい学校を、必ず設立しようと決心しました。その後 20 年近く過ぎ、自分の子が小学校に入ることになりました。（中略）しかし、私には今日の学校教育も過去に比べてあまり変化してないように考えられ、また、そのような教育の姿は近い将来に変わりそうにも見えませんでした。それで私はもどかしい心で一日も速く新しい学校を建てられなければならないという考えを強く持つことになりました[7]。

既存の学校教育への批判は、長時間の詰め込み教育、科目数の過多、学校暴力、道徳的水準の低下、入試中心の教育による人性（人間性）教育と感性教育の軽視、成績による人間評価等で少数の成績優秀な生徒を除く多数の生徒の人生を「敗北人生」にさせていることに向けられていた（姜大仲 2002）。このような考えはそのまま山清ガンジー学校の教育課程に反映されていた。

表 1　山清ガンジー学校の教育課程[8]

教科分類	教　科　目
知識教科	倫理、国語、英語、漢文、歴史、政治、経済、共通社会、共通科学、化学、共通数学、数学
感性教科	音楽、美術、伝統音楽と伝統踊り、表現芸術、デザイン、工芸
自立教科	農作、料理、家造り、服造り、生命農業、生態建築、編集出版、情報とメディア

知識教科は一般学校と同じ科目だが、感性教科は人間と自然に対する感受性を発達させる科目であり、自立教科は人間の生活の最も基礎的な衣・食・住居問題を自ら解決できるように助ける科目で編成されている（姜大仲 2002）。山清ガンジー学校は一般学校で重視する知識教科より感性教科と自立教科を重視し、多様な科目を編成、選択できるようにしている。

山清ガンジー学校の教育課程が持つ最大の特徴は生徒中心の教育課程編成と運営になっていることだと考えられる。開校初期には、「授業選択制」という制度を設けて生徒が受けたくない授業がある時にはそれを拒否し、生徒自身が希望する、意味ある活動ができるようにした。以降、その替わりに「科目選択制」、「代替活動推薦制」、「代案的授業の再構成」という制度が設けられた。「科目選択制」は、生徒が希望する多様な科目を開設し、生徒の進路と必要に沿って総履修単位の 48%に該当する 97 単位まで選択し、自分で教育課程を編成できるようにした制度である。「代替推薦制」は、必須科目でも生徒がその学びに苦しみを覚えるなら、教科教師、担任教師、保護者 3 人の推薦書と生徒自身の代替活動計画書を提出し、学校長が承認すると、必須科目を代替できるようにした制度である。「代案的授業の再構成」は、生徒が必須科目を代替して他の活動をするよりは、生徒の状況と水準に合わせて代案的内容と方法で必

須科目を再構成することが望ましいという判断の下で、授業を再構成する制度である。山清ガンジー学校のこのような特徴は、ガンジー学校の教師であるジョンミスクの「生徒中心主義教育の具現方案」（『新しい教育』2001 年 9 月号）で詳述されている。

他の代案学校も山清ガンジー学校のように、公教育の画一的で入試中心の教育を拒否し、多様な教育課程を実践している。代案学校の教育理念、教育課程にはばらつきがあるが、公教育に対する失望と批判から始まり、生徒中心の代案的教育を模索するという共通の性格を持っているとはいえる（金テヨン 2008）。

2-2. ガンジー学校の変化

2000 年度に入ってから、山清ガンジー学校では新たな葛藤が発生する。それは、進学の問題である。ガンジー学校が開校した当初は、生徒が楽しく、幸せに学べる空間と機会を与えることに力点が置かれていて、そのための努力で精一杯の状態であった。それは、2000 年度も同じであったが、3 年間の課程を終えて卒業する生徒が現れることによって、保護者と学校間に意見の差が生じたのだ。

> 2000 年度の春であった。だから、1998 年にガンジー高等学校に入学した生徒が 3 年生になった時であった。（中略）子供たちの大学進学についてすごく心配していた一部の保護者がこんな奇抜な提案をした。（中略）代案学校なのに生徒を予備校に団体で通わせるなんて、それが話しになるのか。しかも入試中心の教育を避けようと立てた代案学校で、全人教育を諦めて入試教育を選択しろと提案するなんて、こんなことが起きるものなのか[9]。

生徒のための現在の学びも大事だが、将来の「生[10]」のためには今のままではいけないという考えが保護者中心で生じたのである。このような葛藤は毎年 3 年生の保護者の間で続けて現れることになった。多少の差はあるが、他のガンジー学校でも同じだった。生徒が学校で学んだ通りの生を生きるためにはどうすればいいのか、ガンジー学校が真剣に考えることになったのは、自然的な流れだといえるだろう。代案教育が教育自体の問題ではなく、生の問題であるという認識ができたといえる。

このようなガンジー学校の葛藤は韓国社会の学歴中心主義に起因している。韓国の高校 3 年生が選択できる進路は非常に限られている。多くの生徒は大学進学を選択しており、少数の生徒だけが就職やその他の道を選んでいる。大卒者と高卒者間の社会的差別と実際の賃金格差は激しく、高卒者が選択できる職業の幅も非常に狭いし、待遇もいいとは言いがたい。教育科学技術部によれば、2013 年度の高卒者の平均賃金は大卒者の 3 分の 2 程度で、約 10 万円の差があった。それで、みんなが大学に行こうとし、中でも名門大学に行こうと頑張っている。大学による差別も激しいので、社会的に認められ、多様な機会を提供してもらうためには、名門大学に行かなければならないということだ。韓国社会がそうであるため、代案教育を選択した生徒、保護者も悩むことになるのだ。代案教育白書（2007）によると、代案学校の高校課程の卒業者の 85％が大学進学を選択している。自分自身の自発的な学びのための選択なら問題にならないが、他の選択肢がなくて、やむを得ない選択であれば、これは考えるべき問題になる。

学校を卒業する生徒をどのように助ければいいのか。この悩みにガンジー学校は直面した。そして、生徒が楽しく、自発的に学べるように構成した教育環境と教育課程の中心が、生徒が代案学校での学びを生活で実現していけるように助ける方向へと徐々に移っていくことになった。堤川ガンジー学校はそれを地域との連係を通して模索しようとしている。ただ学校で学ぶだけでなく、実際の地域社会に入り、

共に暮らしながら学ぼうということだ。それは当時の堤川ガンジー学校の校長であったヤンヒチャンとのインタビューと学校紹介文でも確認できる。

> 学校を中心とした地域運動、学校を中心とした代案教育運動を考えながら実践しているのです。我らが住んでいるこの地域で教育もし、文化も作り、経済的な問題まで解決できる、調和できる理想的な村を作れば、この子たちは都市に、ソウルに行くのではなく、ここで住むことになるということです。（中略）　ここで一つのモデルを作ってみよう。もちろん教育が中心です。教育が中心ですが、地域と共存できる何かを。我らもここに住んでいますから、教師である以前に住民でもありますし。さらに、共感した家庭が 11 家庭もここに来て住んでいます。学生のことで親の人生が変わったのです。都市文化ではなく、農村を中心とした共同体文化を作ってみようという考えで学校をやっています[11]。

> ガンジーの不服の精神を持って入試中心の公教育に順応せず、新しい文化を作るために努力する。学校という枠を超え、社会活動に積極的に参加する現場教育を大事にし、21 世紀のイシューである生命と平和教育を強調する[12]。

錦山ガンジー学校の紹介文にも「学校が村の中にあり、村の人的・物的資源と学校の教育課程が結合して教育コミュニティーを形成しています。[13]」と書いており、地域との連係を大事にしていることが分かる。

現在、堤川ガンジー学校はガンジー教育文化センターとクムト（徳山地域児童センター）を設立し、教師と生徒が共に参与、運営している。ガンジー教育文化センターは多文化家庭の保育、多文化子供図書館、韓国語レッスン、地域文化事業等の活動を行っている。クムトは徳山地域の小学生のための文化活動、福祉活動、教育活動を行っている。生徒達は代案学校で学んだ重要な価値を、ここで実際に適用し、経験している。錦山ガンジー学校は具体的な組織は作ってないが、地域社会で多様なボランティア活動と社会活動を行っている。また、両学校の教師、保護者の一部が学校のある地域へ引っ越してきて、新しい村造りをしている。これは学びと実生活を一体化するための試みで、地域での多様な人生のあり方を模索する過程でもある。

堤川・錦山ガンジー学校の教育課程でも生徒の学びと生の一体化のための努力を見つけることができる。

表 2　堤川ガンジー学校の教育課程編成表（2012 年度）[14]

区分	教　科	履修区分	科　　目
基本教科	自治活動	必修	週開けの時間、家族会議、学級会議、サークル活動
	哲学		ガンジー文化、ボランティア活動、文化哲学、ガンジー哲学、研究（論文）
	読書		朝読書
	体験		移動学習、自然体験（山登り）、海外体験学習、インターンシップ
	自立	必修選択	農業、服作り、木工、料理
自己主導的学習教科	テーマプロジェクト	必修	大テーマ

	作業場		
	集中式授業		
	共通教科	必修	英語、体育、数学、本との出会い、自然は我が友、自分を見つける芸術、家族史、生活の発見
		選択	多様な授業開設
	個人プロジェクト	選択	

表 3　錦山ガンジー学校の教育課程編成表（2012 年度）[15]

		科　　目	合　計
学校必修		家族会、学年の時間、文化の夜、学校哲学、国土旅行、海外文化研修、進路研究、インターンシップ、卒業論文、卒業作品、ボランティア活動	必修 66
選択	感性	音楽、美術、スポーツ	4 以上
	自立	自立基礎、自立深化	8 以上
	知識教養	知識、教養	8 以上
	自由	自由選択	45 以上
	その他	生徒開設	
		個人開設	
総　単　位			131 以上

両学校は、開校初期と比べると、教育課程編成表において科目自体の大した変更はほとんどなかったという。しかし、後から教育課程運営上において、「生と学びが一つになる教育」を具体的に明示し、このための教育としてインターンシップ、移動学習、ボランティア活動等、学校外部での教育実践を重要視し、強化してきたそうだ。こうした教育実践は、一般的に、生徒が既存社会によく適応できるように手伝う教育課程として活用されている。しかし、堤川・錦山ガンジー学校では学校での学びを生と一体化するために活用している。特に、インターンシップはその役割が中心である。

表 4　堤川・錦山ガンジー学校のインターンシップ対象団体

ボランティア団体	生命ヌリ共同体-インド、全州多文化共同-美術治療授業、ダイル共同体-カンボジア、グットネイバス奉仕団、ネパル孤児院など
NGO/社会活動	人権教育センター「ドゥル」、忠北環境連帯、清州・忠北環境運動連合、大邱緑色消費者連帯など
生態/共同体	ザンソンハンマウム共同体、ファチョン田舎教会、中国チョンウンド共同体、サダナ共同体、ガッコル生態農業研究所、ビョンサン共同体など
教育	クムトゥル自由学校、堤川ガンジー学校、日本キノクニ学校、ガンジー子供学校など
社会的企業	YMCA チモル CAFÉ、エコパティメアリ、ハザノリ団、ヌリ村パンカフェ、グル、アモンディエなど
出版	オッチョン新聞社、小さいのは美しい、本を読む社会作り国民運動、ミンドゥレ出版社、シンクレアなど
文化	ソンミサン村劇場、キンコンドラムライン、ルバト、文化企画「風」、サンサン工場、劇団「振動」、劇団 21 など
その他	韓国芸術治療学会、民族問題研究所、建築現場補助、真州環境運動連合など

表にある多くの市民団体や企業等は代案的価値観を実現するための多様な活動をしている現場である。ガンジー学校の生徒達は、自分の必要に応じてインターンシップの現場を選択することができる。また、数回に渡って複数の現場に行くことも可能である。自分より早く代案的価値を追究し、そのために活動している多数の先輩とその現場を通して、これから自分の進路を選択する時に役に立つ知識を学び、経験できる。

> インターンシップをして代案的仕事をしている人に会ったこともあります。その時感じたのは、韓国社会はとても競争的で現実的であるが、競争より協働を、お金より幸せを追求する人がうちの学校に多いということでした。代案学校を卒業した生徒がその学びと経験を通して新しい人生を作っていけるのでは、と思います[16]。

そして、各ガンジー学校は毎回インターンシップの経験を集めて資料集も作っている。一人の生徒が経験できるインターンシップには限界があるため、互いに間接経験ができるように各自の経験談を集めるのだ。

生徒のための教育実践とそのための空間の提供に力を尽くしていたガンジー学校は、卒業者の登場と共に進路の問題が顕在化する 2000 年代に入ってから、「生と学びが一つになる」ための教育課程にも力を注ぐことになった。

2-3. 現在のガンジー学校

各ガンジー学校が開校してから 10 年以上の時間が経った。ガンジー学校は学校内外での様々な問題や葛藤を経験しながら発展し、現在はある程度の安定期に入ったといえる。しかし、近年代案学校をめぐる代案教育陣営に新しい変化が生じていて、それが今後のガンジー学校に影響を与えるのではないかと思われる。それは、代案教育第一世代といえる金ヒドン、ヤンヒチャン等と代案教育連帯を中心に行われている「代案社会」に対する論議のことである。

その背景には、代案学校のアイデンティティ問題があった。代案学校が特性化学校として公教育内に受容されて以来、公教育内部でも制度改善のための多様な政策が採用されたが、その中には代案学校の長所を活用したものがあった。2007 年に登場した「革新学校」が好例だといえる。

革新学校は入試中心教育から脱皮し、創意・人性（人間性）教育に中心を置いた新しい学校モデルを意味する。革新学校は公教育内の一般学校と同じく国家水準の教育課程を移行する制度圏の学校であるが、「自律学校」として学校運営の自律性がある程度保障されていたので、小規模の学級、体験学習、協力と協同、教育課程の差別化など、代案学校の長所を公教育内で実現しようとした。その代表的な例が南韓山初等学校で、閉校直前の田舎の学校が教師と保護者の協力で注目される学校となった。その後、2009 年度の京機道教育監になった金サンゴンが強く革新学校作りを推進することで全国に拡大し、2011 年には 160 校に至るようになった（金ソンチョン・オゼギル 2012）。

このような学校が公教育の内部で続けて現れることによって、代案学校では、代案学校とは何かというアイデンティティの混乱が生じた。代案教育運動陣営では代案学校のアイデンティティ問題と今後の方向性について論議され、多様な意見が提示された。このような一連の過程を「定命運動」と称しており、2009 年から始まった定命運動は 2011 年「定命宣言文」が発表されることで一段落した。「定命宣言文」は、①哲学に生命を与えよう、②十分な学びにしよう、③正確に診断しよう、④参与し、コミュニケーションをとろう、⑤ネットワーク化し、連帯しよう、⑥進路は真の道である、⑦地域で代案の花を咲こうという七つの課題を提示している。それを生徒と教

師、関係者が学校だけでなく、生の全てを通して学び合いながら、実現していこうと宣言したものである[17]。

代案学校はアイデンティティ問題で混乱が生じた期間も毎年、卒業生を輩出し続けた。また、ガンジー学校を含む代案学校の卒業生の多数が依然として大学進学を選択した。大学選択の理由については別の調査が必要だろうが、進路選択の幅が狭いということは変わりないところである。代案学校の卒業生が、代案学校で学んだ価値を追求する生を歩みたくても、個人としての限界がある。このような状況の中で、長年代案教育運動を展開してきた教師、代案学校関係者の間で、代案的価値を追求するための社会的土台の必要性が提起された。代案学校のアイデンティティ問題がある程度まとまった 2012 年度に、金ヒドンによって初めて「代案社会」のことが提起され、代案教育関係者の中で数回に渡っての議論があった。そしてそれを具体化するために 2013 年「代案社会教育フォーラム」を開催することになった。代案社会とは、代案教育で大事にしている重要価値が実現される社会を意味する。「代案社会教育フォーラム」は代案社会に対する認識を拡大し、関連重要価値を論議し、共有するためのフォーラムとみられる。

> 昨年は代案教育連帯が 11 周年を迎える年でした。我らはこれからの新しい代案教育連帯の 10 年を「代案社会に向かう代案教育」と標榜しました。代案社会フォーラムが出帆し、数回のフォーラムを通して現場の関心と参与はある程度できています。少なくとも、用語と概念はある程度知られたと思っています[18]。

フォーラム参加者たちの間では、個人差はあるものの、代案的な生のための社会的土台の必要性には共感が得られた。ただ、そこに参加していないガンジー学校の教師の中には、違う考えを持つ者もいた。堤川ガンジー学校の J 先生と錦山ガンジー学校の P 先生は、「その必要性には同意するが、現在のガンジー学校の状況においては、それまでの余力がない」と、その実践については否定的であった。堤川ガンジー学校や錦山ガンジー学校の生徒とのインタビュー（2014 年 4 月）においても、代案社会への認識があまり広がってないことが確認できた。このような現状から考えると、「代案社会」の実現に向けての行動が広がることはまだ先の話になるかもしれない。しかし、個人の力だけで代案学校で学んだ通りの生は、今の韓国社会では難しいという認識は教師と生徒が共通に持っているため、社会的土台の必要性は今後も続けて提起されると考えられる。

実際、堤川・錦山ガンジー学校で実践している村作りも、ある面では、代案的な生のための、一種の社会的土台作りとしてみることができる。ヤンヒギュは、現在の商業主義的文化の中では代案的な生が難しく、同様の価値観を持った人々が交流しながらその道を模索する空間が必要だと考え、村作りを始めた。

> ガンジー学校は学校でありながら、村であり、企業である。（中略）つまり、ガンジー学校は代案学校であり、代案的な村であり、代案的企業を追求している。（中略）全国にある 5 つのガンジー学校の周辺には 10 世代の規模から 40 世代の規模に至る多様な村が造られている。保護者を中心として、特にガンジー学校の卒業生の保護者達が中心となって、都市から学校周辺に移り、新しい文化のある村を創造している[19]。

ここには、代案教育で追求する価値を実現するため、まず、それに相応しい環境を備えようとする目的も含まれていたといえる。1998 年に山清で始まった村作りは堤川と錦山地域でも続けて実施された。

特に堤川ガンジー学校の事例に対して金ヒドンは、代案社会の実現において素晴らしいモデルだと述べている。「本人（堤川ガンジー学校）は代案社会運動体だという自覚がなく、ただ地域に根を下ろした教育共同体程度で自分のことを認識しているように見える」という彼の言葉から、本来の意図とは違うかもしれないが、代案社会への土台作りが既に進行中であるというイメージが得られた。

3. 終わりに

山清ガンジー学校は当時の公教育に対する批判から、生徒のための新しい教育を模索する中で登場した全日制代案学校であり、生徒中心の教育実践を行ってきた。その後、卒業生が現れる 2000 年代はじめから、生徒の進路のための教育実践に力を注ぐことになった。堤川・錦山ガンジー学校も同様で、生徒中心の教育課程の運営と共に、地域との連携、ボランティア活動、インターンシップ等を通した卒業後の人生のための教育実践を強化してきた。つまり、

生徒中心の教育　→　生徒中心の教育　+　代案的な生のための教育実践

のように、ガンジー学校の教育実践の性格が変化したことがわかる。

さらに近年は、「代案社会」の実現に関する議論が代案教育運動側で起き、「代案社会教育フォーラム」を開催する等、代案的な生のための社会的土台作りが必要だという認識を広げようとする動きが現れている。このような代案教育運動の動きは、その運動に近い位置にあるガンジー学校にも影響を及ぼすことになるだろう。ただ、その必要性には同意するものの、すぐに具体的な行動に移すことには否定的な立場に立っている人々もいるため、ただの議論で終わる可能性もある。

ガンジー学校は活発に代案教育運動を展開してきた全日制代案学校であり、他の代案学校に様々な影響を及ぼしてきた学校である。そのため、ガンジー学校でみられた変化は他の代案学校にも生じていた可能性が高いといえよう。本研究では、そこまでの分析を行えず、次の課題としておきたいが、もし、その仮説が妥当であるならば、ガンジー学校の変化は代案教育運動における全日制代案学校の一般的変化であるといえる。

日本では、フリースクールが韓国の代案学校に近い学校形態といえる。しかし、フリースクールは不登校やヒキコモリなどの生徒を受け入れ、一般学校の諸問題を補完する役割を果たしているが、代案学校のように、生徒のための多様な教育実践にまでは、十分広がっていると言えない。グローバル化によって、生徒や保護者の教育的ニーズは段々多様化し、学校への要求は強くなってくると考えられる。それに応えるためには、教育の範囲が公教育を超えて広がる必要があり、日本でも、多様な学校形態が現れるべきだ。その時、韓国の代案学校が日本において、よい参考になると思われ、このような研究が役に立つと考えられる。

註

[1] ここでは、公教育機関が伝統的に提供してきた定型化されている教育とは差別化できる、新しい学習経験を追及する学生・保護者のために、特定の教育理念及び目標の下で特殊の教授・学習方法を用いて多様で新しいプログラム、活動、教育環境を提供する学校と定義する。

[2] 山清ガンジー学校は認可を受けて 1998 年度から特性化学校となったが、中学課程を巡った問題が深化する 2002 年までは、政府の関与無しで高校課程が運営されて、山清ガンジー学校はその時までを対象とする。

[3] 堤川ガンジー学校は本来山清ガンジー学校の中学課程であった。それの認可問題を巡った慶南教育庁との葛藤時期である「ガンジー学校事態」を経て、2002 年に堤川へ移転、中・高統合課程となったのが

堤川ガンジー学校である。
[4] 2001 年 2 月に新しい学校準備委員会を構成、山清ガンジー学校よりもっと自由な教育実践ができる学校を作ろうとする意志を持って準備し、2002 年度に開校したガンジー学校である。
[5] 教育人的資源部『代案教育白書 1997-2007』2007 年、112 頁。
[6] 余泰田『ガンジー学校の代案探し』ウリ教育、2002 年、18 頁。
[7] ヤンヒギュ『幸せな学校』ガンジー学校出版部、2011 年、86-87 頁。
[8] 姜大仲「代案教育の制度的葛藤と争点研究」ソウル大学、2002 年、56 頁。
[9] ヤンヒギュ、前掲書、2011 年、192、193 頁。
[10] 韓国語では「生きる」という意味を持つ「살다」の名詞形である「삶」を意味する。
[11] ヤンヒチャン氏インタビュー（2011 年 9 月 29 日）より。
[12] ヤンヒギュ、前掲書、2011 年、299 頁。
[13] ヤンヒギュ、前掲書、2011 年、304 頁。
[14] 堤川ガンジー学校「2013 年学校紹介」から参照し、再構成。
[15] 錦山ガンジー学校「2012 年度高等課程学校要覧」から参照し、再構成。
[16] 錦山ガンジー学校の生徒、J さんとのインタビュー（2014 年 4 月 23 日）。
[17] 代案教育連帯「2013 年定期総会」2013 年、4-6 頁から参照。
[18] 金ヒドン氏インタビュー（2014 年 7 月）より。
[19] 錦山ガンジー学校「2012 年度高等課程学校要覧」2012 年、35 頁。

参考文献

李ウォンヒ「公教育体制基盤の代案学校の構成」教育学論叢第 29 巻 1 号、大慶教育学会（旧ウリ教育学会）、2008 年。
李ゾンテ「代案教育の可能性と限界」韓国教育研究第 5 巻 1 号、韓国教育研究所、1998 年。
李ゾンテ「代案教育の哲学的基礎探索（1）－生態主義教育理念を中心として」韓国教育第 26 巻 1 号、韓国教育開発院、1999 年。
李ゾンテ「学校教育の危機の実態と原因分析」韓国教育開発院、2000 年。
李ゾンテ『代案教育と代案学校』ミンドゥレ、2001 年。
李ゾンテ『代案教育理解する』ミンドゥレ、2007 年。
李ビョンファン「代案教育を通した青少年の学業中断予防の方案」中等教育研究第 55 巻 1 号、慶北大学中等教育研究所、2007 年。
姜大仲『代案学校は学校ではない』ハギシスプ、2010 年。
姜テジュン・李ゾンテ・李ミョンジュン「「新しい学校」構想：いい学校の条件とその具現方案探索」韓国教育開発院、1996 年。
ガンジー学校生徒ら『私には夢を見る権利がある』ガンジー出版部、2008 年。
教育人的資源部「代案教育白書 1997～2007」教育人的資源部、2007 年。
金ヨンイル「新自由主義教育改革の成果と限界」教育学研究第 37 巻第 3 号、韓国教育学会、1999 年。
金ソンチョン・オゼギル『保護者が知るべき革新学校のすべて』マメドゥリム、2012 年。
山清ガンジー学校『一人の魂が育つと全世界が成長する』ナズンサン、2012 年。
ソキョンヒ「学校知識の変化要求による代案的教育課程設計方向の探索」教育課程研究第 24 巻第 3 号、教育課程研究会、2006 年。
永田佳之「オルタナティブ・スクールと教育行財政に関する国際比較―質保証と公費助成の分析を中心に―」比較教育学研究第 31 号、日本比較教育学会、2005 年、156-176 頁。
橋本慶男「韓国の代案教育を選択する青少年の現状と課題」アジア文化研究 16、国際アジア文化学会、2009 年、25-39 頁。
橋本慶男「韓国の代案教育に対する社会的支援体系」アジア文化研究 18、国際アジア文化学会、2011 年、21-29 頁。
橋本慶男「韓国の代案教育の歩みと今後の課題-日本の代案教育との交流を通して-」岐阜聖徳学院大学紀要教育学部編 51、岐阜聖徳学院大学、2012 年、71-81 頁。
ファンジュンソン・李ヘヨン「代案学校関連の法制整備方案の研究」教育法学研究第 22 巻 1 号、韓国教育開発院、2010 年。
ミンドゥレ編集室『代案学校ギルラザビ』ミンドゥレ、2010 年。
ヤンヒギュ『幸せな学校』ガンジー学校出版部、2011 年。
余泰田『ガンジー学校の代案探し』ウリ教育、2002 年。